


Jayaseelan (1990) が remnant/correlate は VP の外へ重名詞句移動していると提案してから、空所化構文の制約の多くを統語的に説明することが可能となった。関連する諸制約は第 5 節で取り上げるが((21), (22)), Jayaseelan によると、下のような重名詞句移動に課される制約が空所化構文を制約する。

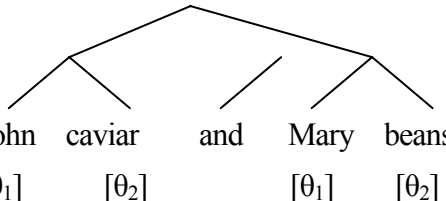
(4) John [_{VP} ate *t*] caviar and Mary [_{VP} ate *t*] beans



重名詞句移動は上のいずれのアプローチにおいても採用可能なので、これにより空所化構文の多くの制約を説明できるようになる。

このようなメリットにもかかわらず、二つのアプローチには共に問題が生じる。二つのアプローチは一見大きく異なるが、「remnant が述語と直接結びついて意味解釈を得る」と前提する点では共通している。(1), (3), (4)いずれの場合も、*Mary, beans* は述語 *ate* と直接結びついて完全な文 *Mary ate beans* の形を取る。しかし、次節で述べるように、空所化の起こった節は完全な文を構成せず、先行する等位節に解釈を依存していることを示唆するデータがある。このようなデータにもとづき、本稿では次のような構造形成の可否が空所化構文の可否を決定すると提案する。

(5)



John caviar and Mary beans
[θ₁] [θ₂] [θ₁] [θ₂]

すなわち、remnant は述語と結びついて解釈を得るのではなく、correlate と等位構造を形成することにより、同じ θ 解釈を保証される。より正確には、remnant のペア (*Mary, beans*) が correlate のペア (*John, caviar*) と等位接続され、その構造の下で同じ θ 役割を共有する。この場合だと、*Mary* は *John* とパラレルな位置関係にあるので *John* と同じく述語 *ate* の行為者 (Agent) として解釈される。*beans* も同様、対応する *caviar* と同じ *ate* の対象 (Theme) として解釈される。このようにして、remnant は述語と統語的に結びつかずに、述語との意味的な結びつきを表すことができる。

3. 等位構造における格・ θ 役割の付与

3.1 問題となるデータ

次の例文は前節で見た先行研究に対する問題となる。

(6) John ate caviar and she/her ate beans.

(7) a. John talked about [Mr. Colson] and Mary ~~talked about~~ [that he had worked at the White House].

b. John can depend on [my assistant] and Mary ~~can depend on~~ [that he will be on time].

まず(6)だが、remnant (*she/her, beans*) が述語 *ate* と結びついて完全な文を作っていると考えるならば、主語にあたる remnant には主格が付与され、*she* のみが可能な形となるはずである。どうして主格以外の形も許されるのか、先行研究では(アドホックな想定をする以外に)説明できない。

(7) はこれまで指摘されてこなかった種類のデータであるが、私がインフォーマントに確かめたところ、容認可能であるとの回答を得た。この空所化構文は、Gap 部分に前置詞を含み、かつ remnant の二つ目が *that* 節となっている。remnant と述語を直接結びつけて完全な文を復元する先行研究に従えば、(7)が示すように、*that* 節は前置詞の補部位置を占めることになる。しかし、次の例から明らかなおとおり、*that* 節が前置詞補部となることは許されない。*that* 節は格位置に生じることができないのである(Stowell (1981))。

(8) a. *We talked about [that he had worked at the White House].

b. *You can depend on [that he will be on time]. (Sag et al. (1984:40))

従って、先行研究は(7a, b) を非文であると間違っず予測してしまう。

(6), (7) の例は、空所化の起こった等位節は完全な文を作るのではなく、もっと別の方法で解釈されるのではないかということを示唆する。同様の示唆が以下の例からも得られる。

(9) a. John can't eat caviar and Mary can't eat beans. (scope: *can't ((j, c) & (m, b)))

b. John can't eat caviar and Mary ~~can't~~ eat beans. (scope: ^{OK}can't ((j, c) & (m, b)))

Siegel (1987) によると、空所化が起こらない(9a)の場合、*can't* はそれぞれの等位節しかスコープ領域に取ることはできないが、(9b)のように空所化が起こると文全体をスコープに取り、「ジョンがキャビアを食べ(るというのに)メアリーが豆を食べるなんてあり得ない」のような解釈を持つこともできる。この例に関しては先行研究でも(少なくとも二つ目のアプローチならば)説明可能であるが、第一等位節内にある *can't* が第二等位節をもスコープ領域に含むことができるという事実は、第二等位節が完全な文を構成せず、統語的・解釈的な意味で第一等位節に依存している可能性を示唆する。

3.2 等位構造: 第二等位項は格を必要としない

例文 (6), (7)で remnant の特異性を2つ示したが、同じ特異性が等位構造の第二等位項に関しても観察される。次の例を参照されたい。

(10) a. [Pat and I/me] went to the party.

b. John invited [Pat and me/I] to the party.

(11) a. We talked about [Mr. Colson] and [that he had worked at the White House].

b. You can depend on [my assistant] and [that he will be on time].

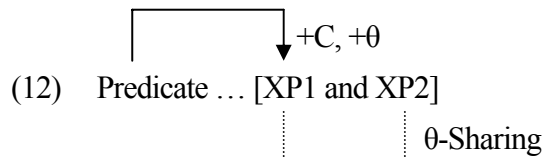
(Sag et al. (1984:40))

ある種の格を付与される位置に等位構造が生じた場合、その格を標示せねばならないの

は一つ目の等位項のみである。二つ目の等位項はランダムな格具現形を取ることが許される ((10))。³ また、that節が第二等位項として生じるならば、それは前置詞の補部位置を占めることができる ((11))。

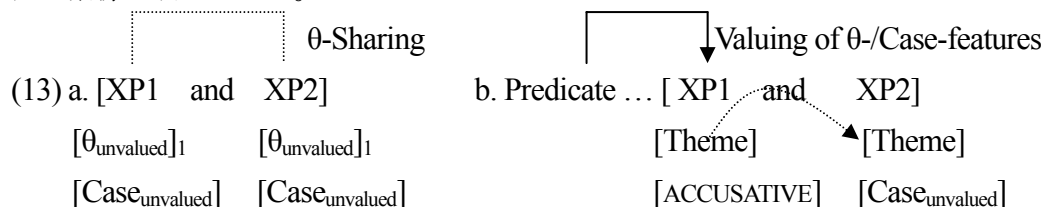
第二等位項のこの特異性は次のように説明することができる。格付与は一つ目の等位項にのみ行われる。二つ目の等位項には格が付与されないので、(10)のようにランダムな格具現をしたり、(11)のように格を付与されてはならない that 節が斜格付与位置に生じることができるのである。

格付与は θ 役割解釈のために必要とされる、という可視性条件 (Chomsky (1986)) に従うとすると、では、格を付与されない第二等位項の θ 役割解釈はどのように保証されるのだろうか？ 本稿は、等位構造そのものがその保証を行うと考える。以下の図を参照されたい。



述語が第一等位項(XP1)に θ 役割を付与し、それを可視的にするため格も付与したとする。述語の θ ・格付与特性はすでに満たされているので第二等位項(XP2)とは直接関係付けを持たない。しかし、等位構造を形成する以上、XP1 と XP2 は同じ解釈を持つはずである。すなわち、XP2 の θ 役割が必ず XP1 と同じになることは構造から明らかであり、明らかである以上 XP2 が格を持つ必要はない。等位項同士の θ 役割共有を以下、 θ -Sharing と呼ぶ。(10), (11)の第二等位項が格を付与されなくてよいのは、その θ 役割が述語から直接付与されたものではなく、第一等位項との θ -Sharing によって与えられたものだからである。

極小理論(Chomsky (2000, 2001))の枠組みに沿うように言い直すと次のようになる。項の θ 役割を[+解釈可能]な形式素性と見なすと(cf. Boškovic and Takahashi (1998))、XP1 と XP2 がマージして等位構造を作った時点ではまだそれぞれの θ 素性の値は決まっていない。しかし、等位構造の下 θ -Sharing が起こり、(13a)のように2つの等位項の θ 素性に同じ指標が付与される。

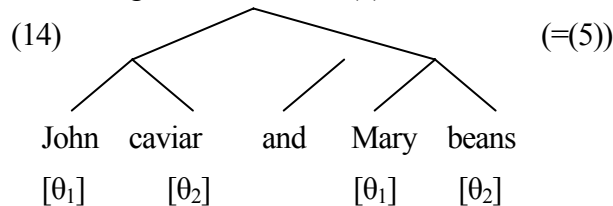


その後、述語と等位構造の間で Agree が起こると、より probe に近い XP1 のみが θ 役割および格素性の値を与えられる。この時、XP2 の θ 素性は XP1 と同一指標を持つため、同じ値を持つことができる。XP2 の格の値は決まらないままなので、(10), (11) のような特異性が生じる。(格の値は θ および ϕ 素性照合の反映(reflex)にすぎず、LF/PF 破綻を引

き起こさないと考える。)

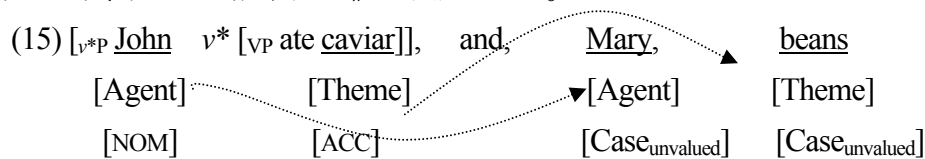
3.3 空所化構文: Remnant は格を必要としない

空所化構文 remnant の特異性は、等位構造の第二等位項の特異性と同じであると考えたので、前節で提案した θ -Sharing を使って関連する空所化構文データ(6), (7)の説明を試みる。すなわち、remnant は述語とではなく correlate と結びつき、その等位構造の下で θ -Sharing が起こる。例文(1)の場合、次のような等位構造ができる。



より正確には、remnant (*Mary, beans*) のペアと correlate (*John, caviar*) のペアが等位接続され、各ペアの対応する要素の間で θ -Sharing が起こる。この時点で θ 素性の値が決まっていなくても、それに付与される指標が共有される。

この等位構造形成とは別に、動詞 *ate* は *John, caviar* とマージし、 v^*P 構造を作る。その構造の下、項の θ ・格素性の値が決定される。⁴



つまり、動詞が直接 θ 役割を決定するのは *John, caviar* のみで、*Mary, beans* とはマージせず、従って θ 付与も行わない。しかし、*Mary, beans* の θ 素性は(14)においてそれぞれの correlate と同一指標を持つので、それに従って同じ値を持つことになる。ゆえに、(15)が示すとおり、*Mary, beans* は v^*P フェイズの派生において v^* とマージせず、 v^*P とは別個の syntactic object (SO) として存在するが、 θ -Sharing によって意味役割を決定し、述語との関係を明示することができる。

4. 派生: NARROW SYNTAX と DISCOURSE SYNTAX

3.3 節の説明を採用するためには次の疑問に答える必要がある。

- (16) a. (14) の等位構造はどこで、何の動機付けによって作られるのか。
- b. それが(15)の統語構造とどのような形で関係付けられるのか。
- c. (15)のように SO が複数ある場合、その派生は収束できるのか。
- d. SO が一つにまとまらないのに PF で線形順序を与えられるのか。

(14)の構造を narrow syntax で作ることはできない。*John, caviar* は述語でないのでマージしてペアを作る動機付けを持たない。また、もしマージできるとしても、(*John, caviar*)が一つの SO を作ってしまったら (15)のような v^*P を形成することができなくなってしまう。

本稿では、(14)の構造は *narrow syntax* とは別の計算部門 *DISCOURSE SYNTAX* で作られると考える。*discourse syntax* の仕事はトピック、フォーカス、コントラストなどの文脈に関係する素性を付与することである。これらの談話素性が統語移動を引き起こし、LF解釈に影響を与えることはよく知られているが、*narrow syntax* が直接トピック素性、フォーカス素性を付け加えられるとは考えられない。つまり、フォーカス解釈を生じることを目指してフォーカス素性を付け加えるような裁量を *narrow syntax* に持たせるのは極小理論の精神に反している。*narrow syntax* はあくまで語彙要素が持ち込んだ素性を使って計算をすすめる部門であり、談話に関わる統語素性の付与は別の計算部門で、別の派生メカニズムに従って行われるべきである。

では(14)の構造は *discourse syntax* でどのようにして作られるのであろうか。本稿は、「コントラスト素性」付与を動機付けとして(14)が形成されると考える。2つの命題がコントラストな関係にあるとき、コントラストを形成する要素が少なくとも2つ存在し、かつそれらが同じ意味役割をもつことが必要である。1つしかないものをコントラストすることはできないし、全く関係ないものをコントラストすることもできないからである。同様のコントラスト制約は空所化構文にも見られる。

(17) a. *John ate *yoghurt* and Nora ate *at midnight*.

b. Cf. Peter has become *crazy*, and Chris ~~has become~~ *an incredible bore*.

((a) from Féry and Hartmann (2001:4), (b) from Sag et al. (1984: 36))

(17a) の *yoghurt* と *at midnight* は述語との意味的關係が全く違うのでコントラストができない。このように *remnant* と *correlate* がコントラストを形成できない場合、空所化構文は許されない。(統語範疇が異なっても、(17b)のように意味的關係が同じならばコントラストを形成でき、容認可能な文となる。)

(i) 意味的に同じ要素が (ii) 少なくとも2つ存在するときのみ *discourse syntax* でコントラスト素性を付与できる。この2つの条件は、「コントラスト素性は等位構造の各等位項に付与される」という素性付与メカニズムに還元できる。(17a)の場合、*yoghurt* と *at midnight* は意味的に関連しない要素なので等位構造を作ることができず、コントラスト素性をもらうことができない。コントラストを形成しない空所化構文は非文なので、(17a)は排除される。

また、*discourse syntax* で付与される談話素性は *narrow syntax* の計算に使われることになるので、2つのレベルの計算は連動していると考えerことは妥当である。すなわち、*narrow syntax* で *v*P* フェイズの派生が行われているとき、そのフェイズの計算に関わる *SO* のみが *discourse syntax* の計算にも関わることができる。

以上の想定をふまえると、(14) 形成にいたる派生の流れは次のようになる。まず、*narrow syntax* の *v*P* フェイズにおいて次のような5つの *SO* が形成されたとする。

(18) [DP1 John], [DP2 caviar], [DP3 Mary], [DP4 beans], [Coord. and]

SO は自由に *discourse syntax* に移動し、そこで然るべき談話素性を受け取ることができる。(18) の SO が *discourse syntax* に入ったとき、コントラスト素性が付与されることになるが、この素性を受け取るためには先に述べたとおり、等位構造を作らねばならない。そのため、(14)に示したような等位構造を作ることになる。つまり、(14)はコントラスト素性を受け取ることを動機付けとして形成される。等位構造の下で θ -Sharing が起こるが、これはあくまで等位構造を作ったことによる副産物にすぎず、 θ -Sharing を目的として(14)が作られるのではない。

discourse syntax で(14)の構造を作った後、それぞれの SO はまた *narrow syntax* に戻る。付与されたコントラスト素性および θ 指標は持ち帰ることができるが、等位構造自体は持ち帰る必要がないので、(18) の 5 つの SO は(14)を作った後、やはり 5 つの SO として *narrow syntax* に戻ってくる。

(19) [DP1 John], [DP2 caviar], [DP3 Mary], [DP4 beans], [Coord. and]

[θ_1]	[θ_2]	[θ_1]	[θ_2]
[contrast]		[contrast]	

(※ [contrast] は DP1+DP2, DP3+DP4 のペアが持つ)

この後、また *narrow syntax* の派生計算が続いていく。(英語のコントラスト素性は移動を引き起こさない。) 最終的に v^*P フェイズの派生が終わったときには(15)のとおり 4 つの SO が残ることになる。*Mary, beans* は v^*P 構造に組み込まれないが、 θ 指標を通して意味役割を与えられ、文の要素として解釈可能になる。

(16c, d) の疑問についてはページ数の制約により詳述できないが、たとえ SO が複数あってもそれが合法的な LF 解釈を生むならばその派生を破綻させる理由にはならず、また一般的な談話条件などによって線形順序を与えることも可能であると考えられる。

5. データ説明

上の分析を用いて、数ある空所化構文の制約がどのように説明されるかを以下見ていきたい。まず、(17)で既に述べたとおり、*remnant* およびその *correlate* (のペア)はコントラストの関係になくなくてはならない。また、等位構造のもとでしか空所化は許されない。さらに、*remnant* の数はなるべく2つであること、文末要素としての解釈を与えられることが望ましいとされる。ただし、この最後の制約は絶対的なものではなく、文脈次第では違反可能であることも知られている (cf. Kuno (1976), Sag et al. (1984))。先行研究はこういった性質を記述するのみであったが、本稿の分析ではコントラスト素性付与にかかわる制約としてこれらの性質を説明することができる。(17)については既に述べたが、その他関連するデータと、それらがコントラスト形成に失敗している理由を以下簡潔に述べる。

(20) a. *John ate caviar whereas Mary ate beans. ← 等位接続詞(*and, but*)がないと

(14)の等位構造を作ることができないので*

- b. *John ate caviar and Mary quickly ate beans. ← remnant *quickly* とコントラストを形成する correlate がないので*
- c. *John can eat quickly and Mary might eat slowly. ← remnant *might* はcanと θ -Sharing を起こさないなので、正しい解釈を得ることができず*
- d. *John ate caviar and Mary ate caviar. ← 全く同じ要素はコントラストできないので*
- e. *John ate caviar at 10 and Mary ate beans at 11. ← コントラストされる要素が多すぎて、何をコントラストしたいのか焦点がぼやけてしまうので* (ただし、文脈を与えたりして焦点がはっきりしている場合は容認可能)
- f. Max gave Sally a nickel, and Harvey a dime. (Kuno (1976:302))
- (i) ^{OK} ...and ~~Max~~ gave Harvey a dime/ (ii) *... and Harvey gave ~~Sally~~ a dime
 ← コントラストを形成する要素は新情報であり、新情報は大概の場合文末に現れる。従って、大概の場合、remnant は文末要素として解釈される。

次に、統語制約について考える。remnant—remnant 間の局所性、antecedent—Gap 間の局所性など多くの局所性制約が空所化構文に課されることが知られている。これらは全て、フェイズ派生の局所性として説明できる。すなわち、discourse syntax で結合される要素は同じフェイズに生起する要素でなくてはならない。例えば上位節の要素と埋め込み節の要素は異なるフェイズに属するため、remnant としてペアにすることはできない ((21a))。 (21b)は、*Mary, beans* が *claims* の埋め込み節の中になく、主節として [*Bill claims that John ate caviar*] と等位構造を作った場合の非文法性を表している。主節要素たる *Mary, beans* は埋め込み節要素 *John, caviar* と異なるフェイズに生起することになるので (14) のような等位構造を作ることができず、従って然るべき解釈を得ることができない。

(21) a. *Bill claims that John ate caviar, and Mary ~~claims~~ [~~that John ate beans~~].

b. *Bill claims [that John ate caviar], and Mary ate beans.

また、remnant を選択する前置詞を空所化できないことも知られている。

(22) a. John talked about caviar, and Mary ~~talked~~ about beans.

b. *John talked about caviar, and Mary ~~talked~~ about beans.

(22)の文法性の差は次のように説明される。remnant が解釈されるためには(14)のような等位構造が作られた際に θ -Sharing を起こし、correlate と同じ θ 役割を保證される必要がある。(22)において、talk の付与する内的 θ 役割を担うのは DP *caviar* ではなく、PP *about caviar* である。従って、それと対応して θ -Sharing を起こす remnant もPPでなくてはならず、(22a)のパターンが義務的となる。

最後に、(9) で見た、スコープ解釈について考える。(9b)において、*Mary* は *John* と同じ θ 役割を持つ。従って、LF 解釈の際、*Mary* は *John* と同じ構造位置で解釈される。

John は 2 つの A 位置に関わるので、*Mary* も同様、次に示すように 2 つの A 位置のうちのいずれかで解釈されることになる。

(23) [_{TP} John can't [_{v*P} John eat caviar]]

 | | |
 Mary Mary beans

Mary が [Spec, v*] で解釈されるオプションをとった場合、*can't* は *John, Mary* (正確には (John eat caviar), (Mary eat beans)) よりも高い位置にあるため、広いスコープ読みが可能となる。

6. おわりに

本稿の主張は次のようにまとめられる。

- I. 空所化構文を作る直接の動機付けは、discourse syntax におけるコントラスト素性付与である。この素性は等位構造の下で付与されるため (14) のような構造が作られる。
- II. 等位構造を作った副産物として、 θ -Sharing が起こる。((19))
- III. narrow syntax においてある DP が述語とマージし、 θ 役割の値を与えられたならば、同じ θ 指標を持つ DP も同じ値を与えられる。((15))
- IV. 従って、いわゆる remnant は述語とマージせず、独立した SO のまま解釈される。
- V. 空所化構文は複数の SO から構成され、その PF 語順などは一般的な談話制約から決定される。
- VI. 空所化構文に課される制約は、(i) 意味的な動機付け、(ii) フェイズの局所性、(iii) θ -Sharing のメカニズム、のいずれかに関わる。すなわち、空所化構文の remnant および correlate は (i) コントラストを形成する要素でなくてはならず、(ii) 同じフェイズに生起し、(iii) 同じ θ 役割を共有するにふさわしい要素でなくてはならない。

discourse syntax が談話情報を統語素性に読み替えて処理する部門である以上、この部門はもちろん空所化構文を形成する以外にもさまざまな働きをするはずである。discourse syntax の詳細なメカニズムはどのようなものか、それを想定することは本当に妥当なのか、といったさらなる探求はこれからの研究課題としたい。

注

*本稿は、第 28 回関西言語学会 (2003 年 10 月 19 日、於: 神戸市外国語大学) で口頭発表した内容に加筆と修正を加えたものです。発表に際して貴重な助言・コメントを下された多くの方々から感謝申し上げます。

1. Abe and Hoshi の分析は多少異なり、音形を持たない VP が生起して Gap となると考えている。LF において antecedent のコピーがその位置に挿入されることで解釈が行われる。
2. より正確には、ATB 移動するのは TP であり、remnant, correlate は TP 外に移動しているためも

との等位項位置に残留するとされる。

3. 第一等位項もランダムな格具現をすることが、場合によっては可能である。

(i) [Him and me] ate it all. (Johannessen (1998:62))

ただし、(少なくとも英語では)このパターンは主語位置の等位構造に限られ、例文(10)のように頻出もしない。本稿はこの種のデータを例外と考え、議論しないことにする。

4. 正確には、*John* の格の値は T から与えられる。

参考文献

- Abe, J and H. Hoshi. 1997. Gapping and P-stranding. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 101-136.
- _____. 1999. Directionality of Movement in Ellipsis Resolution in English and Japanese. In *Fragments: Studies in Ellipsis and Gapping*, ed. by S. Lappin and E. Benmamoun. New York: Oxford: 193-226.
- Bošković, Ž. and D. Takahashi. 1998. Scrambling and Last Resort. *Linguistic Inquiry* 29: 347-366.
- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language*. New York: Praeger.
- _____. 2000. Minimalist Inquiries: The Framework. In *Step by Step: Minimalist Essays in Honor of Howard Lasnik*, ed. by R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka. Cambridge, Mass.: MIT Press: 89-155.
- _____. 2001. Derivation by Phase. In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz. Cambridge, Mass.: MIT Press: 1-52.
- Féry, C. and K. Hartmann. 2001. Focus and Prosodic Structure of German Gapping and Right Node Raising. Ms. Universität Potsdam & Humboldt Universität Berlin.
- Hankamer, J. 1973. Unacceptable Ambiguity. *Linguistic Inquiry* 5: 17-68.
- Jayaseelan, K.A. 1990. Incomplete VP Deletion and Gapping. *Linguistic Analysis* 20:64-81.
- Johannessen, J.B. 1998. *Coordination*. New York: Oxford University Press.
- Johnson, K. 2003. Bridging the Gap. Ms. University of Massachusetts, Amherst.
- Kuno, S. 1976. Gapping: A Functional Analysis. *Linguistic Inquiry* 7: 300-318.
- Ross, J.R. 1970. Gapping and the Order of Constituents. In *Progress in Linguistics*, ed. by M. Bierwisch and K. Heidolph. The Hague: Mouton: 249-259.
- Sag, I, G. Gazdar, T. Wasow and S. Weisler. 1984. *Coordination and How to Distinguish Categories*. CSLI, Stanford University.
- Siegel, M.E.A. 1987. Compositionality, Case, and the Scope of Auxiliaries. *Linguistics and Philosophy* 10: 53-75.
- Stowell, T. 1981. The Origins of Phrase Structure. Doctoral dissertation. MIT.
- Zoerner, C. 1995. Coordination: The Syntax of &P. Doctoral dissertation. University of California, Irvine.